

# 観自在王院跡第16次現地説明会資料

令和6年11月2日 午後1時～  
平泉文化遺産センター

## はじめに

観自在王院跡は、奥州藤原氏二代基衡の夫人が建立した寺院の跡で毛越寺の東隣に位置しています。『吾妻鏡』には観自在王院（阿弥陀堂と称する）は基衡の妻（安倍宗任の娘）が建立したこと、小阿弥陀堂も基衡の妻が建立したことが記されています。

境内の大きさは南北 250m、東西 120m程で、敷地の北側に大阿弥陀堂・小阿弥陀堂の跡があり、その南側には舞鶴が池と呼ばれる大きな園池があることが、昭和 29～31 年、昭和 47～52 年の調査で確認されています。昭和 49～53 年度に史跡整備が行われましたが、整備完了から 40 年が経過し老朽化が進んでいたため、修復を目的とした再整備を行うこととなり、再整備に必要な情報を得るため平成 30 年度から発掘調査を再開しました。

## 1、調査要項

期 間	令和 6 年 8 月 20 日～11 月中旬(予定)	目 的	整備に伴う内容確認調査
面 積	約 100 m <sup>2</sup>	調査主体	平泉町教育委員会

## 2、調査の概要

昭和 52 年の調査において、観自在王院西側から南北方向の石敷道路跡が発見されました。この石敷道路は毛越寺と観自在王院との間にあり、道幅は約 30m、路面には 3～20 cmの石が敷かれていることが確認されました。また、昨年度の調査で石敷は新旧 2 時期あることが新たに分かりました。



今回は、昭和 47 年の 4 次調査で見つかった舞鶴が池へ水を引く導水路の確認と観自在王院西門跡の外側（西側）の道路を確認することを目的とした調査を行いました（写真 1）。

○導水路：4 次調査では毛越寺北側の弁天池方向から舞鶴が池への導水路が確認されています。今回の調査では南側調査区でこの導水路を再確認し、幅は 55cm 前後、深さは石敷の面から 10cm 前後であることを確認しました（写真 2）。



写真 2 再確認した導水路（東から）

○溝跡：南側調査区の北端部で見つかった深さ 1 m 程度、幅約 70cm の溝跡です。底には砂が堆積していたことから水が流れていたと考えられます（写真 3）。平成 6 年度の第 9 次調査で今回の調査区と隣接する町道部分を発掘した際に見つかった溝跡の続きにあたる部分です。現在でもこの溝跡に沿って U 字溝が造られており、昭和の整備以前からこの場所が用水路に使われていたとみられます。



写真 3 溝跡（東から）

○石敷：南側調査区で見つかった石敷は、粘土に埋め込まれた 10cm 強の石と、それよりもやや上位で見つかった 10cm 弱の小ぶりのものがあることから、昨年度の調査と同様に新旧二時期の可能性を考えています（写真 4）。北側調査区では 10cm 弱の石が疎らに見つかりました（写真 5）。また、東西方向の溝跡が見つかった付近を境にして高低差があります。



写真 4 南側調査区の石敷（東から）

○出土遺物：かわらけ、白磁、陶器が出土しました。

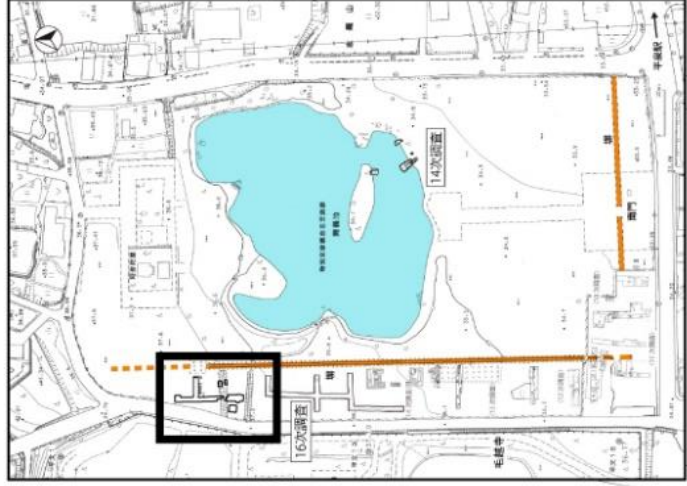
## 3、まとめ

- ① 南側調査区では 4 次調査で見つかった導水路を再確認しました。導水路と石敷のそれぞれが造られた時期については調査を進め、今後検討していきます。
- ② 南側調査区と北側調査区の間で東西方向の溝跡が見つかりました。この溝跡の性格や年代については今後検討していきます。
- ③ 昨年度調査で確認された新旧二時期の石敷が今年度調査区にも続いていることを確認しました。
- ④ 北側調査区の石敷は南側と比べて疎らな状態で見つかりました。また、石敷が確認された面の高さは南側よりも約 25cm 高いことがわかりました。この地形の高低差や石敷の密度の差については今後検討していきますが、西門前は道路と異なる使い方をされていた可能性があります。



写真 5 北側調査区の石敷（西から）

Y=+23,910m



X=-112,180m

町道

西門跡

<第16次調査>



写真3 (東から撮影)

X=-112,190m

写真5 (西から撮影)

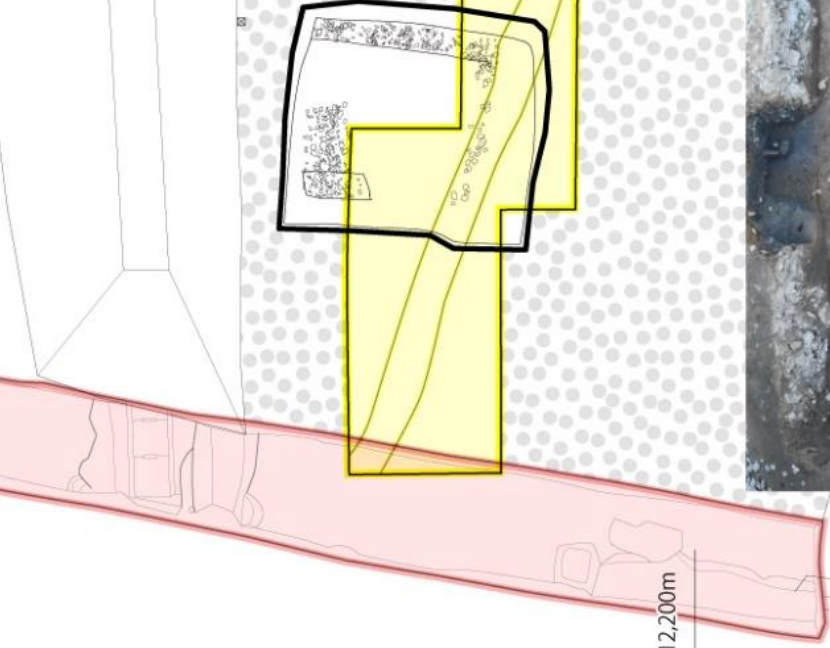


写真2 (東から撮影)



写真4 (東から撮影)



凡例	石敷き範囲 (昭和整備)
	第4次調査
	第7次調査
	第9次調査

観自在王院跡 第16次平面図

1:100

0

5m



Y=+23,930m

Y=+23,920m